

聖德太子讃仰研究会『勝鬘經義疏』研究記録（抄）（その二）

——『勝鬘經義疏』現代語訳と研究との抄録——

小田村 寅二郎

まへがき（一） 聖德太子讃仰研究会の発足の経緯と、その経過

この研究会は、いまから十四年前の昭和三十九年の秋に、茂木^{もとき}一郎翁を客員として、故・桑原^{くわはら}曉一、葛西順夫、夜久正雄、戸田義雄の四名によつて「月例・研究会」として発足し、毎月の研究会は、各人の家庭を持ち廻り会場にして行ひ、研究会終了のあとは、その家庭の心づくしの夕食を受けて、当日の討議内容についての追検討をはじめ、世の政治・思想の万般について、また、古今東西の偉人のこと、文学・宗教のことなどについて、時の経つのも忘れるほど、歓談を尽した会合の積み重ねでありました。

しかしそれよりさらに十二年ほどさかのぼる昭和二十七、八年頃からのことですが、茂木一郎翁・田代^{たしろ}二見先生（画伯）のお二人を客員として、前記の桑原・葛西・夜久・戸田の四名によつて、同じ様な研究会方式によつて、『古事記』の共同研究が、「月例・輪読研究会」として発足、この会が十年で完了してをり、そのあと、昭和三十八年から約一年間は、『勝鬘^{しょうまう}書紀』の「推古天皇紀」の個所の「月例・輪読会」が持たれ、そのあとに、ここでご紹介する聖德太子の御製疏である『勝鬘^{しょうまう}

経義疏^{きぎしゆ}

の「月例・輪読会」が開始されたのであります。すなはち、聖徳太子の御著作に取組む前に、すでに十余年間を費して、『古事記』の全巻と『日本書紀・推古天皇紀』についての細密な「輪読による共同研究」を重ねてゐた、といふことは、意味深いことであつたと思ひます。なほこの間、昭和三十五年十一月に、田代二見先生が御逝去され（享年七十一）、昭和四十四年四月には、茂木一郎翁が御逝去（享年八十三）されてをられ、かつ、これらの研究会の中核であられた桑原晩一先輩もまた、会員全員の痛歎のうちに、昭和四十八年五月に御逝去（享年六十一）になりました。この『記録』が、桑原先輩の直接の御協力と御指導を得られずに、ここにまとめられる段取りとなりましたことは、会員全員に取つて、まことに心残りのことです、いかんともしがたいことであります。

なほ、会員のうち、昭和四十年七月から小田村寅二郎が参加、昭和四十一年四月から梶村昇が加はり、のちに、昭和四十七年九月から島田好衛が参加して今日に至つてをります。（現会員は六名で、うち四名が本学の旧・現教官であります。）

この研究会は、昭和三十九年以来、九年間を費した昭和四十七年十二月の「月例会」を以て、『勝鬘経義疏』全巻の研究を、一応完了し、昭和四十八年一月の「月例会」から、「第二回目の輪読研究」を開始しました。この時から、「發言内容をテープ録音」し、これを、行武靖枝さんを煩はして「發言要旨」をまとめる作業をしていただき、それを「素材」として、「会員による『本書の原稿』（以下、『本稿』といふ）の分担執筆」が始められたのです。以後は、「各目の執筆文」を再び「月例・輪読会」において討議を重ね、次第に『本稿』に近づけて来たものであります。（なほ、『本稿』は正漢字ルビ付き——漢字音には新仮名でルビ、和訓には正仮名遣ひでルビ——ですが、ここでの発表は漢字を略字体にし、ルビを大幅に削除しました。）

まへがき(一) 聖徳太子とその御製『義疏』について

『日本書紀』によれば、聖徳太子は、推古天皇六年（西暦五九八年）数へ年で二十五歳の御時、推古天皇（女帝・時に御年四十四

意に『勝鬘經』を講ぜられた、とあります。『勝鬘經義疏』は、『維摩經義疏』『法華義疏』と共に、太子の御著作として伝へられてゐて、これら三つの『義疏』は、『三經義疏』と呼ばれ、『法王帝説』によれば、太子の御年四十二歳、推古天皇二十三年（西暦六四五年）に、太子の師・高句麗の慧慈（西暦五九五年に來日、法興寺に住す）が、その帰国に際して、その本国にも流傳した、と記されてゐます。

まへがき 三 『勝鬘經義疏』の全体の構成について

聖徳太子は、御製疏『勝鬘經義疏』の中でまづ初めに、『勝鬘經』全体の趣旨を述べてをられます。その中で、勝鬘といふ一人の女性の「生ひ立ち」から、「大乘の教に帰依」して、「これを流通する」に至る勝鬘の生涯を述べられ、『勝鬘經』の成立の事情を説かれます。

ついで、『勝鬘經』といふ經典の正式の名称である『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』といふ題名そのものについて解説をなされています。

それにつれて、『勝鬘經』の全体の構成についてお述べになり、全体を「序説」と「正説」と「流通説」の三つに大別してをられます。すなはち、太子のお考へによると『勝鬘經』は、次のやうに成り立つてゐる、と考へられてゐます。

一、序説

二、正説（この「正説」はさらに次の十四の項に分けられてゐる、とのお考へであります。すなはち）

- (一) 歎仏眞実功德章 (二) 十大受章 (三) 三大願章 (四) 撰受正法章 (五) 一乘章 (六) 无边聖諦章
- (七) 如来蔵章 (八) 法身章 (九) 空義隱覆章 (十) 一諦章 (十一) 一依章 (十二) 顛倒眞実章 (十三) 自性清淨章
- (十四) 如来眞子章

三、流通説（そして三大別の三番目がこの「流通説」である、とのお考へです。）

以上の如くであります。なほ太子は、二番目の「正説」の十四項のうち、(一)から(四)までが「乗の境」、(四)が「行・乗の人」にそれぞれかはる項目であるとされ、また、いま一つの別の分類もなさつて、それは(一)から(三)までが「自分行」であり、(四)以降が「他分行」である、と太子は見てをられます。

太子は、『勝鬘經』全体の構成を以上のやうにお考へにされましたが、三つの「説」と、第二の「正説」の中の十四章の「各章」の冒頭では、その「説」と「章」のそれぞれの「全体的内容」を、全体的に把握なさつた著者自身のものと思はれる文章があり、あはせて「説」・「章」それぞれの「組み立て方」(「科」・「段」・「分」・「段」)についての「解説」がなされてゐます。

私たちのこの「研究会」は、『勝鬘經義疏』についての「輪説研究」の成果を、ここに『本稿』にまとめるに当りまして、太子の右のやうな「御記述の順序」について、深く留意して取組むべきであると判断するに至りました。従つて、特に太子が、各「説」・各「章」の冒頭に記してをられる「御文章」は、經典の各句の解説とは別に扱ふべきである、との結論に達したのであります。従ひまして『本稿』においては、各「説」・各「章」の冒頭に、太子が、その「説」と「章」の全体的な内容について述べてをられる「御文章」についてだけは、これを、その個所の『經典原文』より前の場所に掲載し、次いでその「説」・「章」の『經典原文』を掲載し、次にその原文に対応する太子の『義疏』の文を掲載するといふ配列の順序で、『本稿』を進めることにしました。そのために『本稿』においては、『義疏』の文章の段落のし方が、法隆寺蔵版の『昭和会本』と異つてゐることをご了承いただきたいと思ひます。(今回『本稿』の一部分である「義疏」訓点文とその「現代語訳」と「研究」とを抜き出して発表して、大方の御批判を得ようとするものであります。)

まへがき 四 その他について

『勝覺経義疏』の題名の下の個所に、後に加筆されたと見られる「此是大倭国上宮王私集、非海彼本」といふ『昭和会本』訓点の一文について、本研究会は、次のやうな考へ方を討議しました。

(1) この一文は、後に誰かが書き加へたものであらう、と言はれてゐます。たしかに、太子御自身が、「上宮王ノ私集」と言ふが如く、御自身のことを「客観化」して書かれるわけはなからうし、現存してゐる太子の『法華義疏』（御物）の巻頭に書かれてある「同文の字体」から見ましても、後に書き加へられたもの、と見てよからうと思ひます。

しかし、この一文が加筆されてゐることについて考へて見るべきこともあるやうに思はれてきます。「後世の加筆」といふだけでは心残りがします。といふのは、「私集ニシテ」といふ用語は、次にある「海ノ彼ノ本」といふ用語と対比されてゐる語であることを考へれば、「私集ニシテ」とは、

「上宮王が御親ら手を加へられて集せられたもの」

との意であることは間違ひなく、また、「私集」の「集」の文字には、

「原典に対する諸解釈を集めたもの」

との意があると思はれます。そしてまた、「私集」の「私」の意味には、

「太子御自身のお考へを加へてある文献」

の意もあると考へられます。なぜならば、太子の『義疏』の中には、太子がアジア大陸の諸師の所説を、しばしば引用・紹介されながらも、「私の説は少しく異り」とお書きになつて、独自の御見解を述べてをられる個所が、よく見うけられます

ので、さう考へてよいかと思ふのです。

それといま一つ、あはせて考へておかねば、と思はれるのは、この一文が、後に誰かによつて書き加へられたと考へるときに、「私集」の二字の上に「御」の字がはいつて、「御私集」と書かれるのが、太子に対する後の人々の当然の敬語でなければならぬことが、氣付かれてきます。とすると、単に「私集」とだけ記されてある背景には、この一文を後に加へるやうに指示なさつた方は、太子より上の方、天皇であられるかも知れない、といふことになります。推古天皇について考へれば、太子の『勝鬘經』についての「御講義」を親しく御傾聴になられたことがはつきりしてゐますので、あるいは、推古天皇の御意向に基づいて、後の人が加筆することになつたものかも知れない、といふ考へ方も成り立つものではありますまいか。

(2) 次に、この一文にある「大倭ノ国」の三文字についても、一考しておく必要があります。この時期ごろまでの間で、アジア大陸の文献に見られる「倭」といふのは、日本の国を指してゐますが、多くは卑しめる意味合ひを含んで使はれてゐた、と言はれてゐます。しかし、かうした情況のもとで、太子は「隋」といふ当時の大国に対しての「国書」の文中で、国と国との交際はあくまでも対等の氣宇を以て相對すべきこと、と自覺なさつて、あの有名な「日出ル処ノ天子。書ヲ日没スル処ノ天子ニ致ス。恙無ギヤ。」(『隋書』倭国伝、大業三年(西暦六〇七年)の項から)と書いてをられます。それは、隋の国王をして「蛮夷の書」「無礼なり」と大變に不快な思ひをさせたことが、同じ資料の中に見受けられますが、これは、小国・日本が大国・隋に対して対等の氣宇で相對したことを、余すなく証明してゐる資料でもあります。

かうした推移を考へてみますと、日本としては、太子が持つてをられた国家的國民的な御信念に照らしましても、日本といふ自國を表記するのに、「倭」の一字を以てすることはあり得ず、これに「大」の字を冠して「大倭」と表記して、「倭」の字を持つ「卑しめる語感」を越えた意味を持たせて表記する必要を感じてをられた、と見ることができるのではないでせ

うか。

「大倭」が、「大和」に変つてゆき、「大和」と書いて「ヤマト」と読むことを知れば、日本の国名の呼称の「ヤマト」のまま、文字だけが「倭」から「大倭」に代へられた、と考へてよからうかと思ひます。かく考察すれば、さきの一文にある「大倭国」の三文字の読み方は、「オホヤマトノクニ」と読まずに、「ヤマトノクニ」と読むのが正しいのではないか、と思はれてまゐります。

太子『義疏』訓点文（昭和会本）——太子の『義疏』の中で「はしがき」に当る文章——

夫勝鬚者。本是不可思議。何知如来分身。或是法雲大士。但遠照踰闍之機宜。以女質為化。所以初則生於舍衛國王。尽孝養之道。中則為阿踰闍友称夫人。顯三從之礼。終則影嚮积迦共弘摩訶衍之道。論其所演。則以二十四為体。談其大意。非近是遠為宗。所以如来每説讀同。諸仏発言。則為述成。

右の『義疏』現代語訳

そもそも、この經典の主役として登場する勝鬚といふ方は、その本地はわれわれ人間の思慮判断の及ぶところではない。勝鬚といふ方がこの經典に登場される姿は、ごく普通の人間なのであるが、実は、如来の分身、あるいはまた、法雲の大士であるといふことを、誰が知ることが出来ようか。しかし事實は、さうなのである。

しかし、現実には勝鬚は、お嫁に行かれた国である踰闍国の人々が、大乘の教に目覚め得る時機に到達してゐるの

だ、と見通される機会に、「女の人」の姿で登場されて、その人々を教化なさるのである。それで勝鬘は、まづ初めには、舍衛国の国王の王女としてこの世にお生れになり、御両親にまめやかにお仕へして孝養の道をお尽しになられる。そして御成長なさると、阿踰闍といふ国の国王で友称といふ方の王妃としてお輿入れなされ、妻としての務を立派に果され、夫にねんごろにお仕へなさつた。すなはち、儒教で言ふところの三従の礼（家に在つては親に、嫁しては夫に、夫死して後は子に従ふ、といふ人たるの道、女性たるの道）をよく身につけた方であつた。そして更に後には、仏、すなはちこの世に現はれて影になり日向になつて人々をお導きくださる釈迦とご一緒に、大乘の道をこの世にお弘めになつた方である。

さて、それでは勝鬘夫人が、大乘の道をお説きになつた内容がどういふものであつたか、と言へば、十四章を以て『経』の本体としてをられる。その大意は「非近是遠」すなはち、この世の目先のことだけに利を求める小乗を「非」とし、永遠の救ひになる大乘を「是」とすること、根本にしてゐる説き方であつた。それゆゑに如来は、勝鬘が大乘の道について衆生を説いてゐるのをご覧になられて、いつもそれが諸仏がお説きになる所と全く同じである、と讚歎なさつたのである。かうした理由から、応身の如来は、（勝鬘が説くその通りをそのまま書きしるせば、もうそれでよろしい、と御判断なさつて）勝鬘が説く通りを証明して完成なさつたのが、この『勝鬘経』といふ經典なのである。

（研究一）

「其の所演を論ずれば、則ち十四を以て体と為す。其の大意を談ずれば、非近是遠を宗と為す」といふ文脈は、太

子の『十七条憲法』の文体と大變に類似するものがある、と思はれます。例へば、第一条の「和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す」などが、思ひ出されてくる文脈であります。

(研究2)

太子の『義疏』は、その「書き出しの文章」の中に、すでに太子御自身の「求道の尊い御姿勢」がうかがひ知られます。冒頭の

「夫れ勝鬘は、本は是れ不可思議なり。何ぞ知らん如来の分身、或は是れ法雲の大士なりといふことを。」

の第一句は、正に格調の高い「詩的な文章」であります。勝鬘を如来の分身と讃へたまふ太子の御心情が、この一文にはまる如く、溢れ出づる如く、響き伝はつて来るかのやうであります。声に出して拝誦すれば、「詩歌」の抑揚を覚える感さへします。といふことは、この『義疏』といふ御著述が、すでにその冒頭からして、いはゆる「知的な解説書」ではなく、太子の「体験的な御告白」に根ざす文章であること、「仏を讃仰せられる御思ひ」で「勝鬘といふ具體的な人格を、身近な人間として感覚しようとなさる」御姿勢が、よく拝察できる、のであります。

そして、右の一文に続けて、

「但し遠く踰闍の機宜を照すに、女質を以て化を爲す。」

とあるのは、「如来の分身」と讃へられるべき御身でありながら、勝鬘といふ人格が、現実の人間世界に登場する姿を確認し、われわれ凡人と同じき現実世界の人として考へようとされる筆致を、ここに現しく見るのであります。そして、これに続けて、

「所以に、初には則ち舍衛国の王のみもとに生れて……を尽し、中ころは則ち阿踰闍の友称の夫人となりて……を

頭し、終には則ち影嚮の釈迦と共に……を弘む。」

とあつて、「初には……」「中ころは……」「終には……」と次々に続く三つの句もまた、たいへんリズムカルな脈打つやうな言葉であります。これらは、「如来の分身」と讀へる勝鬘を、現実の世界の人物として浮び上がらせるには、実に行き届いた心配りでありまして、それだけ太子が「現実の人生」を重視なされ、現実から遊離なさらないで、この勝鬘の物語に相對せられたお心組みが偲ばれる所でもあります。そして、勝鬘夫人の一生を、さきの三句の連繋の中に、「一連の間断なき求道の生涯」として仰がれる御心情が、読者の心に映つてくるのでありまして、それはそのまま、太子の人生觀の一端を示したまふこと、と拝察されるのであります。

太子『義疏』訓点文（『昭和会本』）——『勝鬘經・原典』の表題について——（文中のゴチック字は『勝鬘經・原典』の文字）

勝鬘者。世以七宝二蔽其肉身。而今以万行二蔽其法身。故云勝鬘。師子吼者。自宣大理。無所怖畏。義同師子不畏衆狩。故云師子吼。勝鬘就当体得名。師子挙譬為稱。一乘大方便方広者。挙其所説之法。經者訓レ法訓レ常。聖人之教雖復時移易俗。不能改其是非。故云常。亦為物軌則。故称レ法。而此是漢中之語。外国云修多羅。修多羅五義亦如常。釈一修多羅雖有五義。要在涌泉・繩墨二義。即同經之法・常二義。故以此經一代レ彼修多羅也。諸經得名不同。今此經上言勝鬘師子吼。是挙人。下言一乘大方便方広。是挙法。双挙二人・法・為題。故云勝鬘師子吼一乘大方便方広經。

右の『義疏』現代語訳

先づはじめに勝鬘といふ名前について説明すると、世間一般の女性は、七宝しつぽうその他の裝飾品をその身体に飾つて、体裁や容姿の美しさを整へるのが普通であるが、今ここに登場する勝鬘といふ方は、万善まんぜんの行を以てその法身はつしんを飾られたので、^すすぐれた飾り、すなはち、勝鬘しょうむといふお名前がつけられたものである。

次に、師子吼とあるのは、勝鬘が大乗の教を説かれるその様子を説明してゐる言葉であつて、大乗の大理を述べられるそのさまは、あたかも、百獸の王といはれる獅子がどんなに大ぜいの狩人かうりどたちに遭遇しても少しもたぢるゝ所を見せない、あの毅然たる姿勢と全く同じで、堂々たるものであつた。それで、獅子の毅然たる音声の如く信念に満ち溢れるもの、と言ふのである。

それで、「勝鬘」といふ名前は、女性その人について名づけられたものであり、「師子」といふのは、譬をもつて勝鬘が大乗の教を説くさまに名づけたものである。

その次には、一乘大方便方広と書かれてあるが、これは、勝鬘が説いた一乗の教の説き方が、正しく、かつ、普遍的な説き方でなされたことを示してゐる。そして最後の經といふ文字は、日本語では法のり（ほう）とも訓み、常とね（じょう）とも訓む。すなはち、法と常の二つの意味を持つてゐることに注目すべきである。經とは聖人の教を書き記したもので、聖人の教といふものは、時代の変化や社会環境の変化などが起きてても、いつの世の中でも、価値判断の基準たる意義を失ふものではない。それ故に「常じょうつね」といふのであり、また同時に、物事の基準になるものであるが故に、「法ほふのり」といふのである。

しかしながら、此の「經」といふ文字は、漢（中国）の語であつて、外国（印度）では修多羅しゆたらか（sūtra 梵語）といふ。

修多羅の五義については、普通に解釈されてゐる通りでよいと思ふが、肝腎な所は、(その第三の)涌泉(泉)と(第四の)繩墨(軌則)の二義である。それは、「経」といふ文字が、「法」の意味と「常」の意味の二つの意味を持つてゐるのと同じである。そこで、此の「経」といふ文字をもつて、梵語(サンスクリット)の「修多羅(sutra)」に代へて用ひるのである。

いろいろの經典は、それぞれ異つた題名を持つてゐるが、いまこの『経』の題名について言へば、この題名の上の部分に「勝鬘師子吼」とあるのは、勝鬘といふ「人物」についての記述であり、題名の下の部分に「一乘大方便広」とあるのは、その勝鬘が説く所の「法」についての記述である。従つて、この『経』の題名そのものに、「人」と「法」との双方を記してゐるのであつて、すなはち「人法相即」といふ重要な意味が、はつきり打ち出されてゐることに気付かされる。それゆゑに、この『経』の題名が勝鬘師子吼一乘大方便広経となつてゐるのである。

(研究1)

さきに、太子の『義疏』の冒頭の御文章が、「詩歌のリズム」を思はせるやうな御心情の格調の高きを偲はせる対句になつてゐることを指摘しましたが、經典の題名を解説なさるこの項においても、同じリズムが感じられます。すなはち、

「世には七宝を以て其の肉身を蔽る。而るに今は万行を以て其の法身を蔽る。故に勝鬘と云ふ。」

といふ一文も、力強い対句であるばかりでなく、前の句は後の句を殊のほか際立たせる御言葉になつてゐます。このことは、太子が、この經典の主人公である勝鬘夫人をいかばかりか讃仰のお氣持で見えてをられるかを伺はせる所で、

『義疏』の全巻に流れるその御心情が、すでにこの辺りから躍動の氣配を見せてゐる、と感ぜられる所であります。

(研究 2)

かつて黒上正一郎先生(昭和五年九月没、享年三十)が指摘された所ではありますが、太子の『義疏』のこの項の中に見られる「経」の文字についての解釈は、太子が、「現実の人生を遊離しない立場を堅く持たれながら、經典に取組まれたこと」を、如実に示す個所であると思ひます。すなはち、

「経とは、法と訓じ、常と訓ず。」〔小田村私見、ここは、法隆寺の『昭和会本』の上記の読み方ではなく、「経とは、法と訓み、常と訓む」と読むべきではなからうかと思はれます。なぜならば、経の字は「ほう」「じょう」とは訓じませんから。〕と言はれるその背景には、「法」といふことと「常」といふことが「普遍的」なことであり、かつ「人生の常なること」であつて、「人」がいかなる動乱と転変の世に生きてあつても、「物の軌則」たるべき「法」と「時移り俗を易ふとも其の是非を改むること能はざる」「常なるもの」との二つを見失つてはならないことを指し示してをられる、と見られるからであります。「法」と「常」とは、太子においては全く不即不離の意味合ひにおいて把へられてあり、そしてそれが、「経」の字義であるとされるのであります。

(研究 3)

『義疏』のこの項の終りの所で太子が説明してをられる「人と法との一体相即」は、『義疏』全巻を通じて拝察される重要な視点の一つであります。太子が求められた「仏の道」「大乘の道」、そして「永遠なるものへの御祈念」は、決して「観念の世界」に陥り勝ちなものとならないために、殊さらに「人と法とが切り離されぬもの」としての「法」と「人」とを、追究し続けられたのであります。

(研究 4)

今は亡き本会会員の桑原暁一氏は、この個所の「輪読研究会」の折に、次のやうに所懐を述べられたことが、遺された会員たちの耳底に今も残つてをりますので、ここに記録にとどめておきたいと思ひます。

「太子は、『十七条憲法』の「七に曰く」の中で、「世に生れながら知るもの少し。剋く念うて聖と作る」と書いてをられ、『義疏』の中ほどでも、同じやうな御表現が見られるが、この「剋く念う」といふのは、太子を讃仰した後世、鎌倉時代の親鸞のいふ「念仏」の心持ではなからうか。「剋く念う」とは、太子の仰せられる「在家」(出家をしないのである仏教信者のことをいふ)といふことと深く関係してゐることで、世にいふ所の「哲學的に思考する」などといふこととは、全く違ふことだと思ふ。太子は『義疏』のこの冒頭の一文の中で、早くもそのお考へを表明してをられると見られるのであつて、

「七地の境地にある勝鬘が、八地以上の仏の光を受けて深くその身を省み努力する。」

と太子が把へられてゐる見方が大切なのである。それを、「勝鬘は、八地以上の世界を理想として生きた人物」などと解釈してしまつたら、たいへんな間違ひになる。ここをよく注意しなくてはね、と。

太子『義疏』訓点文(『昭和会本』)——『勝鬘經・原典』の構成について——

夫大聖応世爲物說法。不撰經卷之多・少。不別明理之深・淺。皆用三段爲說。

第一序說。序是漸由爲義。

第二正説。正者經之正体。

第三流通説。謂伝ニ之後世。

須ニ此三所以者。良由ニ衆生從來迷塵加復神鈍。若卒聞ニ深理。非但不能受行。更生三傍心。還墜三塗。是以聖人先現ニ殊常之相。令ニ物生ニ樂。於是衆生因ニ此序相。即發ニ樂。應レ聞ニ深理。之心。故即為説ニ正体。序・正既竟。必時衆生皆得ニ蒙レ益。而大聖垂ニ慈說法。非但當時獲レ利。遠及ニ末代。皆同令レ福。故未即為説ニ流通。以勸レ之也。

三段文処者。

從レ初説ニ咸以清淨心歎仏実功德。名。為ニ序説一。

從ニ如來妙色身世間無与等以下。訖ニ汝已親近百千億仏能説此義以來。明為ニ正説一。

從ニ爾時世尊放勝光明普照大衆一竟。經。為ニ流通説一。

右の『義疏』現代語訳

そもそも釈尊といふ大層立派なお方が、現世にはつきりとお姿を現はされて、時代に即応して世のため人のために「法」をお説きになる時には、その教が書物として何巻になつてゐるやうがあるまいが、また、真理の明かし方に深い浅いがあらうがなからうが、それらのことにはかかはりなく、いつでも「三段」に分けてお説きになつてをられる。すなはち、その三段とは、

第一番目には「序説」をお説きになる。「序」といふのは、徐々に導くといふ趣旨で、次第に判らせていくことを

主眼にする。

第二番目には「正説」をお説きになる。この「正」といふのは、經典そのものの正体、すなはち、經典の本旨のことである。

そして第三番目には、さきの「正説」をより広く語り伝へるために、「流通説」をお説きになられる。これは、變ることなき永遠の道を遍く広く後の世まで、相承伝播させるためである。

「法」をお説きになる時にこのやうに三段階に分けて説かれる理由は、衆生といはれる世の人々は、昔から今日まで欲得に迷はされてゐるばかりでなく、教を受け得る心の働きもまた、鈍い人たちだからである。（そのために）この人々が、もし突然に興味深い教を耳にしたところで、とてもその高遠な教のお言葉を理解して教の通りに実践することとは出来ないことであるし、そればかりか、さらに教をけなすやうな邪な心が生じて、かへつて三塗の河に墮ちてしまふやうなことになるかも知れない。釈尊は、かうしたことをお考へになられるからこそ、その立派な教をお説きになる時には、まづはじめに衆生の姿になつて現はれたまふといふ劇的なお姿で御登場になられ、そして触れ合ふ人々をして、その心の中に教を聴かうとする樂しみを生み出させてくださるのである。このやうな釈尊の御配慮があるが故に、衆生は、三段に分けられた教の第一番目にある「序説」によつて、自分から進んで立派な人生を送りたいと樂ひながら、深い真理を聞くことの出来る心を生じて来る。この段階を経て後に、教の本体をお説きになられるのである。このやうにして「序説」と「正説」を説き終へられると、かならずその教を聞いた人々は、みな大きな恩恵を受けるに違ひない。しかし釈尊のやうな立派な方がその教をお説きになる場合は、それだけで終りにしてしまふのではなく、すなはち、ただ当面する衆生のために慈悲のお心をお注ぎになるだけで事畢れりとはせずに、さらに遠く

末代の人々の身の上にまで、同じやうな恩恵を及ぼさうとなさるのである。それ故に、第三番目といふ最後のところで、その教が遍く広く大ぜいの人々に行きわたり、また、末代までの人々がその教の恩恵に浴し得るやうに「流通説」をお説きになり、その教をお勧めになるのである。

この三段に分れる立場から、この『勝鬘經』の全体を見通してみると、

最初から咸清淨心を以て仏の実功德を歎ずといふ箇所までを、「序説」と名づける。

次に如来妙色身。世間に与に等しきもの無しとの「歎仏眞実功德章」の初句から汝已に百千億の仏に親近して能く此の義を説けりとの「如来眞子章」の末尾の句までの全体は、明らかに「正説」を構成してゐる。

そして最後に爾の時に、世尊勝光明を放ちて普く大衆を照しとの「流通説」の初句から、この『勝鬘經』の終りまでの所が「流通説」となつてゐる。

(研究 1)

『義疏』の読み方のことでありますが、この箇所にある「非二但當時獲利」と読んでゐるのが『昭和会本』ですが、『本稿』では黒上正一郎先生が読まれたやうに「非二但當時獲利」と読む方が意味が判りやすくなりますので、その読み方に従ひました。

(研究 2)

『義疏』のこの個所に「大聖」といふ文字と「聖人」といふ文字の二語が使はれてゐますが、ともに釈尊を指してをり、二語に深い意味の別があるとは思はれません。

(研究3)

『義疏』の「世に応じて物の為に法を説きたまふ」の「世に応じて」といふ言葉には、単に「時代に即応して」と解するだけでは物足りない感じがします。「応身」の意をも含むと思はれますので、さきの『義疏』現代語訳の文中に、とくに「この世にお姿を現はされて」の言葉を加へたものであります。

(研究4)

「流通」といふ言葉を、太子が説明なさつて「之を後世に伝ふるなり」と定義せられて、単に「その時代の世に遍く広く弘める」ことにとどまらない説明をされてをられる所に注目したいと思ひます。といふのは、太子は、当時内憂外患の中に推古天皇の摂政といふお立場にあられ、殊のほか、日本の国の永遠なる発展についてお心を勞してをられた方でありました。すなはち、仏の教の永劫不変を信知せられた御心の中に、同時に、日本民族の永久生命を憶念せられる御思ひがそれにつながり、そのともどもの相続継承こそが、太子のお心に確立してをられたことを偲はしめられるからであります。「遠く末代に及んで皆同じく福あらしめたまふ」と更に具体的な解説に及んでをられることに、深く留意せしめられた次第であります。

(研究5)

さきに逝かれた桑原暁一会員は、この『義疏』の個所のいくつかの太子のお言葉についても、示唆に富んだ発言をしてをられましたので、以下、要約して記しておきます。

○「明理の深と浅とを別たす」の「明」の字には「理を明らかにする」といふ「動詞の意」があるのではないか。

○「慈を垂れて」とは「已むに已まねずに慈を垂れたまふ」といふ「已むに已まれぬ思ひ」に近いものを感じさせる。

太子が仏の慈悲心を、そのやうに感得してをられてのお言葉と思はれる。

○「迷塵」「福あらしむ」「皆同じく福あらしむ」などの「迷」「皆」「同じく」などの一語一語の中に、簡単に見過すべきでない太子の御心情を拝察すべきではなからうか。現実の人生そのものを、いかに重視なされながら、この『勝鬘經』にお取組みになられたかがうかがはれる所であつて、さうした「太子のお心の動き」が、直接的に感じられて来る「用語」が沢山に見出されてくるやうである。

○「樂^{ねが}ふ」といふ用語なども、たいへんに「味はひ深い」もので、後に出る「福あらしむ」の「福」も、この樂^{ねが}ひと同じのやうである。人の心のうちに生れ出づる「生の歡喜」は、「樂」の字も「福」の字も含む内容を持つのであらうから、「福」といふ文字の解釈も、金持ちになるとか健康になるとかいふ表面的だけの皮相な意味に受取つてはなるまいと思ふ。「ねがふ」といふことは「ねぐ―神を招き寄せる―」とも通ずる言葉であるし、禰^{ねぞ}宜さんと呼ぶ神官の職名も、それにかかはりのある言葉であらう。

○「漸^{ぜんゆ}出^で」（徐々に判らせていく、の意）といふ言葉に対して、「卒^{には}に」といふ言葉を、相対比なざるやうに使つてをられるのも、たいへんに判りやすい表現であつて、「必要な過程を経ないで」は、絶対に行きつくべき所には行きたくない、といふことを、深くお氣付きになつてをられてのお言葉と拝察される、と。